

県立大など研究グループ

県立大などの研究グループは24日、生薬甘草の成分「イソリクイリチゲニン」

(ILG)を摂取すると腸内の善玉菌が増え、血糖値の上昇を抑えるメカニズムを解明したと発表した。メタボリック症候群の新たな予防薬や改善を促す機能性表示食品の開発につながる可能性がある。ドイツの科学誌電子版に論文が掲載された。

2型糖尿病の内臓脂肪は、インスリンの量や作用の低下につながる免疫異常のほか、慢性炎症、脂肪の蓄積を引き起こす。ILGはそれらを阻害する作用を持つが、どのように働くか分かっていなかった。

血糖値改善の仕組み解明

甘草成分で
善玉菌アップ

一般的に、腸内の悪玉菌が増えて善玉菌が減ると、腸管のバリア機能が低下。悪玉菌の産物が血中に流れ込み、血糖値が悪化する原因になる。

研究グループは、太らせたマウスにILGを摂取させ、腸内細菌の組成を分析した。すると、善玉菌が著しく増加して悪玉菌が減少し、バリア機能が修復されることを突き止めた。

県立大工学部医薬品工学科の長井良憲教授、古澤之裕准教授の指導の下、大学院生の石橋璃子さんらが担当した。

長井教授らは、ILGの含有量を高めた甘草エキスの製造法を確立して特許出願しており、「ILGの働きがより明確になったことで、エキスの魅力や商品価値が高まった」と話した。